

開港五十年と横浜の歴史編纂

— 歴史叙述と歴史意識 —

問題の設定

(1) 開港五十年と横浜の歴史編纂

一九〇九年に横浜で開港五十年祭が挙行されることにより、横浜の歴史はすなわち「開港五十年の歴史」として発見された。開港五十年を祝福する祭典の開催とは、そこへ至る開港からの五十年という歴史を想起することと設定され、したがって、祭典にはそれにふさわしい横浜の歴史が編纂されなければならなかった。本稿は、これまでほとんど検討されることのなかった、一九〇九年に編纂された横浜の史誌を取りあげ、そこでの横浜の歴史の叙述・構成・意味づけのされようについて論ずる。開港五十年祭の開催にあたっては一体化した市民意識の形成が目指され、それは一つに「横浜市民に共通する歴

阿 部 安 成

史」を提示することにもめられた。それがここで考察の対象とする四つの史誌である。ただし、かかる市民意識と連動する歴史叙述としての史誌は、かならずしも安定した全体性を構成していない。そこに齟齬、葛藤、矛盾さえも書き込まれることにより、市民意識を醸成する作品としての全体性が構成される、と考える。本論はまた、開港五十年祭を機に編纂された史誌を素材として、歴史叙述と歴史意識の関係性を問う試みでもある。⁽¹⁾

一 正 史

著者肥塚龍、発行者川本三郎により横浜商業会議所から発行された『横浜開港五十年史』上下二巻は、総頁数二千余、定価一〇円の高価な大冊である（一九〇九年五

月一五日発行。以下『五十年史』とする。全四一章・附録四章からなる『五十年史』は、第一章「建国以来の国是」の表題にあらわれているように横浜の地域史をこえつつも、附録では「横浜の功労者」の人名と履歴により横浜の歴史を充たすように、と構成されている。

巻頭には、大隈重信と島田三郎の序を掲げる。大隈はいう——日本が「海禁」を解き、条約を結び、貿易をおこなう、これすなわち「開港」である。ただしこれを機に展開した論争は港の開鎖という矮小化されたものにならず、だれも「開国」を問題とはしなかった。しかし「世界の気運」を鑑みれば、「港を開くは、是れ国を開く所以」であり、「内地を開かざるを得ない——と。したがって、「開港」と「開国」に程度の差はあるが、「精神に於て、二者の間相異なること無く、この横浜における「開港」を日本にとっての「開国」に連結させ、かかる「開港」＝「開国」という世界史の経験をいかに活用するか、「活ける絶好適例」と、横浜を場とした「我、五十年間の歴史」(傍点はすべて引用者による)を大隈は考えている。

そして、横浜が「海外貿易の為に開ける最初の港

湾」とみなされるとただちに、その開港は「帝国の政策を一変せる起点」ともなる。なぜなら、貿易の「貨物」のみならず、「無形の文物、形而上の思想」も横浜を通過せずには日本に入らないから。大隈は、こうして「五十年前の往時を回顧するに、殆ど隔世別界の感」があると述べ、その変化とはすなわち、「蘆戸漁屋の横浜村が、石室櫛比の市区に變じたるが如きのみならず」、台湾を「我版図」とし、遼東半島を「我勢力範囲」に入らしめ、朝鮮を「我被保護国」化し、「日本が東西貿易の要路に当りて、木炭も亦黄金に化するの觀」あることに思いをはせる。したがって、大隈にとって「開港の爲めに横浜の繁栄を致せるを歎ぶ」ことは、「同時に、我帝国が此好変化を受けたるを祝」うことに等しい。世界史が大きく動いた一九世紀後半に、その変化に應じて横浜は貿易上の繁栄を獲得し、それにより日本が「国家の隆昌を現は」した。横浜こそが日本の一大発展への「鍵錠を握」る。このように歴史を認識する大隈にとっては、横浜商業会議所が発行した「横浜開港五十年史は、過去現在の証迹を世に示す可き好史料」となり、これを読むことで「我貿易及び国運を開進する将来の参考に供せん」

と喧伝されるのである。ここには、横浜の歴史と日本の歴史とを直截に重ね合わせる、いうならば「横浜Ⅱ日本」の言説が濃厚に叙述されている。

同じく序をよせた島田にとっては、横浜などは「安政以前の記録に其名頭はれず」「邦内又横浜の如何なる地たることを知る者少し、況や海外に於てをや」とその知名度は零に等しい。それがいまや「万国の地図に其名を掲げ、東洋頭著の商港として普く世界に知らるゝ」ほどとなった。それは旧に対する「新横浜」であり、かつ小に比しては「大横浜」というべきものである。かくも横浜が発展した要因として、鎖国を脱した「日本帝国の國是」と「港湾自然の地理」とを島田はあげる。しかしもっとも重要なのは、「此地の能く業を興し功を成すに足るを看取し、来り住して経営尽瘁」すること、「横浜の繁栄を助けたる有為の人」の存在であり、だからこそ、「今日繁栄の好果を享受する者は、其由来を尋ねて前人の功勞を追懐」しなくてはならず、そのための導きとして『五十年史』がある、と島田は述べる。

さて、著者肥塚による自序はなにを語るだろうか。まず本書刊行の過程については、市史編纂の必要が一九〇

三年ころから、横浜商業会議所副会頭の来栖壮兵衛とのあいだで話し合われ、開港五十年を指して翌年四月より『五十年史』を編纂し始めたという。肥塚は、横浜の位相を他都市との比較において語る。東京・大阪におよばず、しかし京都・神戸には劣らない横浜であるが、その誕生はというところのいづれの都市よりもあたらしく、「其創設の起原は僅かに五十年に」すぎない。歴史を遡ってみると、「現在横浜市中富と繁栄を集中せる部分は、五十年前鱗族の逍遙場たらずんば、漁翁山媪の宿泊所」であった。「旧都」をみればいずこにも「旧記」があるが、「五十年前始めて開設せられし横浜には、旧記稀」である。そこで、「新興の都会は、之を他に比して一層歴史編纂の必要を感じるなり」と、肥塚は『五十年史』編纂の動機を語った。

大隈から肥塚までいずれもが、横浜の一寒村から世界に名立たる貿易港への一大飛躍を述べる。たしかに開港当時を生きたひとびとにとっても横浜の発展には目をみはるものがあつただろう。たとえば、一八七七年刊行の川井景一『横浜新誌初編』⁽²⁾も「湿地葦原其間漁人農父僅かに家を為す」二十年前からいままや「市街櫛比一都会を

成す」までに至った横浜の変貌におどろく。横浜発展史こそが、開港後五十年を記録する史誌に載せるべき出来事となった。

しかしわたしたちがみるべきは、一つに、一大飛躍を書きとめると同時に、横浜の始原が五十年前に限ってたどられ、横浜の存在すらもが開港に始まると限定され、横浜の歴史が切断されてしまうことである。かかる叙述を、「飛躍Ⅱ断絶」の言説と呼ぶとしよう。二つには、すでにみた横浜の飛躍を日本の発展と重ね合わせる「横浜Ⅱ日本」の言説の登場である。もう一度『横浜新誌初編』をみれば、そこでも「日に盛んに月に昌ん」な横浜「各所の繁華」が述べられてはいるのだが、横浜は「五港の冠たり」とはいえその飛躍が日本の発展と連動するとの叙述はいまだなかった。『五十年史』に登場した「飛躍Ⅱ断絶」(「横浜Ⅱ日本」)の二つの言説は、横浜の歴史を記す史誌の文法を律する、一九〇九年に創出された横浜の歴史意識の表象そのものであった。

『五十年史』は第一章冒頭、「同一地球の上に棲息し、同一太陽の光線に沐浴し、同一人道の下に支配せらるる以上、人類相互の交通は自然」である、と始まる。こう

して地球・太陽・人類という普遍性につづる語群が持ち出されたのは、つづく「日本建国以来の国是は、此天則に従ひ開国進取を是認」してきたとの歴史を開示するためにほかならない。つまり、普遍性の価値をもつ開国進取を常に国是としてきた日本歴史を誇る謂である。「横浜開港五十年史」と題されたものの、本書は「新日本、五十年史と云ふて不可なき者」と賞揚される。

『五十年史』が狭義の横浜開港史にとどまらないのならば、横浜の始原も開港にのみもとめられることはなく、本文の展開においては新編武蔵風土記が参照され開港以前の横浜の姿が記される。また「横浜開港顛末」が考察されれば、開港の期日をめぐっても「安政六年六月二日」は「神奈川を開放したる日付」にすぎず、「万延元年十二月和蘭領事が館を横浜に移さんと約したる日」をもって「横浜開港」の期日としてもよいと述べられる。こうして『五十年史』は、多様な横浜史の解釈を提示しているようにもみえる。

また、『五十年史』には他誌以上に頻出する語句がある——「横浜市民」である。「今日の横浜……其基礎を築きたる」水野忠徳らの尽力を「横浜市民永く記念に留

むべき、などのように『五十年史』に叙述された歴史の主体として、かつそれを読むものの主体性をめぐって「横浜市民」の語がしばしば用いられている。それが顕著なのは第四〇章「戦時の横浜 附東京湾大観艦式」である。まず西南戦争においてすでに「横浜市民は、挙て明治政府に温き同情を寄せ」たという。日清・日露の両戦争の記述において然り、「空前」の出来事という一八九五年の東京湾大観艦式も然り、しかも「観艦式の中心点は横浜及其附近地」となりそこに明治天皇が来たため、「横浜市民は、横浜停車場及其附近に集合して、御召列車の著御を待受け」た、と記される。天皇の存在を介させながら、戦争の記憶・軍事の記憶が「横浜市民」の一体性・同質性に連関する叙述を呼び込んでいる。

大著な『五十年史』は貿易・外交についての日本通史とも呼びうるような構成と叙述をとり、かつ市民の生活にかかわる教育や衛生を論じ、横浜の神社仏閣・景勝地を列挙する。横浜開港の功績もひとり井伊直弼に帰することなく堀田正睦の「辛労」をもねぎらう。ならば、『五十年史』とは横浜史の多様な解釈により構成された史誌とみることも可能だ。しかし他誌に類をみないほどに古

い過去に遡及した日本通史の叙述も、「開国進取」としての横浜開港を正統化するための構成にほかならない。くわえて、開港、自治制度、戦争・軍事、災害を記述する場として過去に遡って「横浜市」を設定し、そこに登場するひとびとを「横浜市民」として括りあげる『五十年史』の叙述法は、なにより読むものをしてその意識に「横浜市民」を発現させるものであった。その意味で後述するように「摘録」や「側面史」を随伴させながらも、『五十年史』は構想される「横浜市民」にとつてのまさに〈正史〉といいうる位置をしめているのである。

二 摘録

一九〇九年六月一五日発行の奥付を持つ『横浜開港小史』は、川本三郎を著作者とし、校閲者に肥塚龍の名をあげている（一七七頁、定価不祥。以下『小史』とす）。くりかえせば、川本は『五十年史』の発行者、肥塚はその著者であった。川本は横浜商業会議所の囑託をうけ、発行者にとどまらず編纂の「補助員」をも務めた⁽⁵⁾。こうして「横浜市を中心として起りたる、諸多の事歴を細論詳説せん」とした、高価にして大著な『五十年史』

が出来あがった。ところがいかんせん、これでは「普く世間に行き渉ると云ふことは一寸六ケしい」ので、「買ひ易く、読み易く」と、川本が『五十年史』の「要部を摘録」したのがこの『小史』である(川本「横浜開港小史発刊の辞」)。

『小史』にも、島田三郎の「横浜開港小史序」がよせられている。島田は大著となつてしまった『五十年史』を「地誌」になぞらえ、「終篇を通して地上の現象を会得する」ために不可欠とする。そのうえで「披覧一瞥心目の間に瞭然たらしむる」情報がもられている「地図」も必要であり、それこそがこの『小史』であるという。「旁引博渉、巻帙彪然、二千余頁に達」する「地誌」と、その「要を摘み精を選」んだ「地図」とが相まって全き横浜開港史が編纂されると、島田は『小史』を推薦している。

ついで、高田早苗(法学博士)の序においては、この適録冊子は、「幕末の外交、幕末貿易の状態に重きを置きて叙述」してあり、かつ「横浜の開港及び其発達に関する重要な事項は、略ぼ此小冊子中に収めら」れているので、その構成は「外交に生れて、貿易に生活するの地」

である横浜にふさわしい選択であると評価されている。

さて、高田によると「吾邦大都市の中に於て、最後に開けて最先に発達したる地」である横浜には、その変遷の急激なるがゆえに「他の都市に異なる所の一種の気風」があるという。しかも著者川本はこの地に住むこと久しく、その「気風」を理解し、「所謂横浜気質に通暁すること人後に落ちない。高田は「横浜気質」とはなにかを詳らかにしはしないのだが、それに照らしてみると『小史』は、「史的叙述に於て、市民の要求を充たすに遺憾無」い出来となったと讃える。このように「横浜気質」とは不明瞭・不定形なのだが、しかしそれはまさに『小史』の叙述そのものにあると提示された。かかる「横浜気質」が「市民」の要求を充たすとは、すなわちこのことを反転させれば、『小史』の叙述を読むことにより感得されるような、曖昧にしてかたちをなさない気風こそが「横浜気質」であり、それがこののち「横浜市民」を弁別する判定規範となつてゆくことを示していよう。

こうしてつくられた『小史』は全二章からなり、第一章「嘉永以前の徳川氏外交」に始まる。本文冒頭の一文にいう、「嘉永以前の外交と云へば、題は大層広び様

であるが、爰に謂はんとするところは幕府外交の大体である。つまりここでは、「嘉永以前」の歴史を記すといえむやみと歴史を過去に遡及するのではなく、江戸幕府開府以降の歴史が摘記されている。しかも以下の章に連繫すべく、その主題は「外交」である。第一章の概説に続いて、第二章ではただちに「米艦の浦賀入港」に記述はおよぶ。以下、条約交渉について述べられ、第一章に至り「横浜開港の実施」となる。この間の叙述で注目すべきところをあげてみよう。

まず一つは、横浜開港の功績をだれに帰するかについて。『小史』本文中には『五十年史』から八葉の図版が転載され、そのうち個人を描くのは「米国水師提督(ペリー)の肖像写真と「正四位上左近衛権中将井伊直弼朝臣肖像及和歌」の二葉である。ペリーと井伊とは、開港五十年祭記念の絵葉書・山車の意匠にも採用されたように、いわば開港の恩人として広く認知されていた人物である。井伊について、『小史』の書き方をみよう。日米通商修好条約調印については、「今若し条約を締結せば、百毀一身に集まる事勿論なれども、国家の為には一身を犠牲に供すること、亦已むを得ざるなり」と井伊の決意

を記す。他方で井伊が関白九条尚忠に宛てた書簡について、「法螺も此位に吹けば先づ結構だ」と読むものの笑いをさそう。そしてめぐる安政の大獄については、「井伊は此大胆な遣り口で、水戸斉昭を始め、同説の大名を夫れ夫れ処分し、兎に角一段の成功を見た」と評価する。条約調印勅許問題・將軍継嗣問題↓安政の大獄↓桜田門外の変といった政治過程を、『小史』はわずかず数頁をあてるだけで必ずしも説得的には展開していない。そうではあっても、開国・開港↓横浜の発展という歴史を叙述するときには、その歴史を表象する人物はほかでもないペリーと井伊の二人となった。このことはなにより本文挿絵に選ばれた二葉の図版にも表現されている。井伊に限ってみても、条約調印にむけられた彼の決意を「国家の為には一身を犠牲に供する」と讃え、その後の国内処理事策としてとった安政の大獄を「成功」と記すのが、『小史』の立場であった。

二つには横浜の発展。開港の翌年にはやくも、「神奈川の繁華は横浜に奪はれ」ただけでなく、「昨日まで寂寞蕭条の無人境、鳥鷺の外には訪づるものなき、芦荻の沼地は今や繁華江戸を庄するの、全盛を迎へて来た」。

こうして開港場横浜が出来あがったのも、「畢竟井伊の指金が其図に当り、水野以下の神奈川奉行が、一生懸命に井伊の指図に従つて、働いたからである」。横浜の発展もまたここで、井伊に帰されるのである。

ところで、英仏軍の横浜駐屯が一八七五年まで続いたことは、横浜に限らず「日本帝国」にとつても屈辱であったという。駐留軍を撤退させえなかった事態をさして記される、「一打大清を圧し、一撃強露を挫き世界一等国の首班に列したる今日の日本帝国、僅かに三十余年の古へを顧れば、今の朝鮮よりも情ない姿であつたのだ」との記述は、現在の「日本帝国」の世界における地位を寿ぐと同時に、過去の横浜＝日本の位置を現在の朝鮮に重ね合わせ序列化している。これは日本の文明化への認識とも重なる。すなわち、かつて不平等条約に苦しんでいたのは、日本がいまだ文明の程度において欧米に「遙かに劣つて」いたため、今や改正されたあらたな条約の施行は日本の文明化をあらわしているという。居留地制度が廃止されかつての居留地がようやく横浜市に編入されたなれば、その日は「内外人」ともに「此記念日を祝せんとて、戸戸に国旗を掲げ四千余人の大勢が横浜公

園に会して、懇親の園遊会を開き大臣以下を招待し」て祝福すべき賀事となる。『小史』においては、横浜の発展とはかくして日本の発展と密接不可分なのである。

このように開港に始まる横浜の発展を叙述する『小史』は、第二章「横浜創業時代の政治」を終章とする。「横浜市民は、社会の業務に就て、諸多の率先者と為つた」との先進性への賛美は、「真正の自治制を施した事」にむけられている。しかも開港当時は「横浜市民は、挙つて貿易商人で他種類の者は一人もない」、つまりここでは一元化された「横浜市民」が想定されている。しかしかかる市民を巻き込み、商人派と地主派に分裂して争われる「大紛擾」が持ちあがった。いわゆる「共有物事件」(さらに「貿易商組合事件」)であり、それは「屢々法廷を煩はし横浜全市は、一時修羅場と化した」。市民を分裂させたこの紛争の記述にほとんど紙幅は費やされていないのだが、本章の末尾、したがって『小史』の最後は、「事の落著したのは、明治二十七年八月であつた」と結ばれている。

「横浜開港小史」と題されたこの書は、大著『五十年史』の「摘録」の役割を負わされていた。とはいえ『小

『史』はただの抄録版ではない。島田がいうごとく「地誌」とは異なる「地図」固有の構成がそこに込められていた。『小史』の重要性は、横浜のひとびとを二分した「大紛擾」が解決され、そうしてふたたび誇るにたる「横浜市民」の一体性を強調し、確認したことにある。『小史』はダイジェスト版とはいえ、その構成が一九世紀までに限られている。その叙述は『五十年史』とは異なり、「横浜市民」を分割し・横浜全市を「一時修羅場と化」した「共有物事件」などの決着を記すところにとどめられたことが重要である。一瞥すれば一体化した「横浜市民」が瞭然となる結びを『小史』は提供している。市民の不和が一件落着となり、読むものをして「横浜気質」を確認させようとの歴史叙述がすなわち、『小史』そのものであった。

三 側面史

開港五十年に先立つ一九〇七年一月二四日付の『横浜貿易新報』から、「開港側面史」が掲載され始めた。のちにこの連載は一書にまとめられ、『横浜開港側面史』の題名で一九〇九年六月二七日の奥付をもって、横浜買

易新報社より発行された(二三八七頁、定価八五銭。以下『側面史』とする)。ただし、その発売日は開港記念日に合わせて七月一日であった(『横浜貿易新報』一九〇九年七月九日。以下紙名は横買と略す)。

まず、横買紙上で連載が始められた意図についてみよう。「はしがき」は、「横浜開港後に起れる出来事」には記録されたいものがあるという。そうした「逸事佳話」は「古老の記憶」にたよるほかない。記者の取材により集められたそれがこれから連載される「開港側面史」となり、「埒もなき事柄」であっても「無限の趣味あり」「横浜の過去を偲ぶ好資料」となるだろう、と読者の愛読を願い、さらに横浜の過去の「記憶」が集められることを乞うている。

それでは、「開港五十年祭前数日」の日付を持つ『側面史』の「はしがき」はなにを語るだろうか。『側面史』は、先行した横浜商業会議所の『五十年史』をみすえての刊行となった。大冊の『五十年史』は、「古を原ね、今を示して剩す所なし、当に以て不朽に伝へて珍とすべきもの」と称賛される。したがってそれとの対比で自己の位置を規定せざるをえない『側面史』である。『五十

年史」を「正面より横浜発達の径路を追ひたるもの」、「裨的」(「経」とすれば、対して『側面史』は「隠れたる細流小溪の傍、幽草閑花の趣を尋ぬる」もの、「浴衣的」)「緯」である。地誌であり、外交史であり、文明史も記し、はては風俗史とも自称する『側面史』と、正面より歴史を記す『五十年史』とを併読することで、「経緯錯綜始めて其全きを成す」と『五十年史』の存在を排除しないのが『側面史』の見識であった。

しかも本書は、「横浜最古の時代の居住者たる数十名の故老に就きて、聴き得たる所」をまとめたという特徴を持つ。「種々の方面に亘る」「正確なる」これらの聞き取りを集め知らしめるのはまさに開港五十年のいまであり、したがってそれらを収録した本書はすなわち、「生きたる歴史の蓄音機」であると自己表明している。

五十年の年月は若者を老いさらばえさせ、壮年のものを逝かせてしまう。だから古老の話を記録し、広く告げることの価値がみいだされるのだが、『側面史』刊行の意義はそこに限定されず、やはり横浜という地域の位相のとらえ方が問題となる。すなわち、かつては「蟹がたく烟細き一寒村」だった横浜が、いまや「巨舶峨船の蟬

集する東洋一の大港」となった。かかる横浜の歴史は、「我島、帝国、全土の開化の歴史」にはかならない。横浜がどのようにして発展してきたかを知ることが、ただちに「日本」の富強を知るてがかりとなる。「日本文明史の縮図は宛として横浜に存す」るのである。ここにも、(横浜Ⅱ日本)の言説と(飛躍Ⅱ断絶)の言説とが相互に支え合うようにして叙述されている。

「歴史の蓄音機」が再生するのは、貿易商増田嘉兵衛や写真師下岡蓮杖などの著名人から市井の「一老翁」「某老人」などと記される無名・匿名のひとびとの記憶の声である。『側面史』はそれら数十名のひとびとを「横浜の建設者」という。彼・彼女の声は「生きたる歴史」として再生されるだけあってさまざまである。

西戸部の「一老人」は談ずる。「今の横浜市の祖先たる横浜村は、其(開港——引用者、以下同)の前から既に一個の村として存在して居た」、しかしいわば「滄海(変じて市街となつた)」と。横浜の変貌に「驚き」をあらわにする老人の記憶は開港前の横浜を知る人ならではの、開港前の記録において横浜の名を抹消する島田三郎の知とはあきらかに異なる。「天保老人某」はより

明解に、「横浜村のことは古い風土記や、其の外の記録に明らかです」という。当然のこと横浜で生活してきたひとびとにとっては、その歴史の始原が開港という出来事におかれることはない。

ここで横買紙上「開港側面史」連載第一回をみれば、増田嘉兵衛の談が「五十年の昔」「横浜町の始」という小見出しのもとに掲載されていた。ちょうど開港の年に江戸から横浜に出てきた増田は、「五十年前と言ふと随分古い事で大方は忘れて了つた」と話し始める。この嘉兵衛翁の回想は、『側面史』では最終章の「回顧雑話」に編集しなおされている。それでは『側面史』冒頭はというと「昔の横浜村」の章は、吉田町辺の開墾のときから数えて八代目の吉田勘兵衛の談話に始まる。しかも勘兵衛翁は、吉田家の記録にしたがって開墾当初つまり「二百年前の横浜村」の様子を語りよみがえらせている。勘兵衛翁の談話は横買紙上「開港側面史」にはなく、『側面史』編纂にあたりあらたに挿入された歴史でもあった。ここに収録された談話の話を「横浜の建設者」という「はしがき」にしたがえば、開墾者の末裔である勘兵衛翁は冒頭におくによりふさわしい人物となろう。

しかし同時に過去が二〇〇年前にまで遡及されたのでは、開港を起点とした〈飛躍―断絶〉という横浜史の叙述を律する文法をみずから裏切ってしまう齟齬を、ここにみることができる。

とはいえ、開港を分岐点としたときの横浜の変貌はまた当然のことで、「只今から考へて見ますと昔の横浜は……何処がどんなであつたやら今では薩張分りません」と吉田やほ女は語り、「横浜の繁栄の中心」である本町で「西洋人斬殺」があつたことを「思ひ出すと、全然夢のやうです」と藤井彦兵衛は回想する。そのうえで、横浜変貌の分岐点をめぐる記憶もさまざまである。「開港十年目」に横浜に來た吉本新輔は、当時は「まだ一向開けて居ませんでした……まだ依然横浜村の姿」をとどめていたと語り、「明治五年日本に始めてと云ふ汽車が通」ってやつと「是からの開け方は一層速やかにになりました」と証す。「皆な變つて仕舞つたと言ひたい位ですが……明治元年頃は……それはく物凄く処でした」とかつての野毛坂を記憶するのが、「名は言はぬが花の某老妓」である。

また一方で想起される過去は哀惜の対象ともなる。開

港前には「何百本も有た」弁天社の松が遷社(一八六九年)にあたり消えてしまったことを「今から考へても惜くてなりません」(七十六翁某)と嘆くものがいれば、そうした変貌があつたにしても「是だけ横浜が開けたかと思ふと決して悪い心持はしません」(増田嘉兵衛)と誇らしげなものもある。

横浜の歴史の始原をどこにおくか、また横浜の変貌の起点をいずこにもとめるかは話者により多様である。それはひとびとの記憶がまさに「生きたる歴史」であることをあらわしている。ところが、日本文明史の縮図が横浜にあるという「はしがき」にある認識に沿うように、多様な記憶の回収先がここで一元化されようとしている。ビッドルの浦賀来航時に米艦船に乗り込んだ下岡蓮杖は、初めてふれた葡萄酒を「毒酒」と思い、それを飲まずにはすまないとなるや、「潔よく此毒酒を仰いで、下岡久之助の一命を日本国のために捧げやうと決心し」たと回顧する。かかる蓮杖がまた「日本の開ける有様は……見て来ましたから、もう外に見たいと思ふことはありませんが、只之れだけがこの蓮杖一生の望みであります」と希うのは、なにあるう「天皇陛下の金婚式と金剛石婚式

の御祝典」である。こうして、横浜にまつわる記憶が「日本」(「天皇」)に回収されようとしているのは蓮杖ひとりに限られず、「無名の一老翁」も「新聞紙の始」をめぐって、「日本新文明の入り口は横浜である」、横浜から入った「西洋の文明は……一瀧千里の勢ひを以て日本国中に伝はつて了つた」と横浜が特化された記憶を語る。無名の「老人が「頭髮の革命」を回想すれば、丁髷を切り始めたころの「日本は丁度今の朝鮮」のようだ、辮髪こそが「支那の文明がまだ進まない証拠」だと、過去のひとびとの風俗をとおして文明の分割線が設定され、それに沿って日本/朝鮮/支那と現在のひとびともが分割されてしまう。

こうした「日本」に回収されようとするひとびとの存在はまた、「横浜市民」であることに支えられている。横浜村の鎮守である弁天社の祭礼と「開港一週年祭」とが複合して催されたのが一八六〇年のことであるが、その「賑やかにして……立派」なさまを記憶している「七十六翁某」が、それを想起すると同時にいまや零落れてしまった弁天社を思えば、この開港五十年祭にあたって「弁天様を彼の儘にして置ては横浜市民が済むまい」と

語られてしまう。賑やかだった開港一年祭と弁天さまの祭礼の過去が想起され、いま眼前に廃れてしまった弁天社があるとき、「両者をつなげるその語りにおいて「横浜市民」の一体性がつよく意識化されている様相を、『側面史』にあらわれた記憶をとおして把握しうるのである。記憶に沿って語られる「横浜市民」の語は『側面史』のなかで、ここにただ一つである。

四 図 録

『横浜開港五十年記念帖』（二八八頁、二円。以下『記念帖』とする）は、二葉の写真に始まる。題字扉につぐ一丁めの上段には明治天皇夫妻の肖像画、下段に「宮城二重橋之真景」。つぎの丁には上段にM・C・ペリーの肖像、さらに丁をめくればまた上段に井伊直弼の肖像と続く。そして、「安政年間の横浜村」「文久年間の横浜村」と題された絵図・絵地図が載せられ、五丁めには「現在の横浜」の地図がある。『記念帖』を開けばすでにこの数丁において、明治天皇、横浜の新旧というように、これすなわち横浜をめぐる二つの言説が図像により表象されているのである。一つに横浜の出来事と日本の歴史

とを一体化させる〈横浜Ⅱ日本〉の言説がここでは天皇夫妻・皇居の図像に、二つに〈飛躍Ⅱ断絶〉の言説は横浜の発展を示す安政・現在二様の図像に表象されている。

成田景暢の編纂した『記念帖』は、横浜時事新報社から一九〇九年二月二十五日に発行され、横浜市長三橋信方がいわば序として述べているように、「百有余の写真版を挿」むを特徴とする。島田沼南（三郎）は、横浜の現在の繁栄を祝すとともに「横浜の進歩は無限無涯を期」し、この『記念帖』をみるものに「此意気（先人の努力を追想し、将来の発展を計る精神と気力）なかる可からず……此心を以て此帖に對せんことを市民諸氏に勸」めてゐる。三橋、島田に続き横浜市選出の衆議院議員堀谷左次郎は「題横浜開港五十年記念帖」を叙し、「実に空前絶後の盛事……真に後世に伝ふべき一大美事」となった「横浜開港五十年祭の祝典」の「挙行の当時横浜全市民が欣欣盛祝せし光景」などは、この『記念帖』を繙けば「歴々として眼前に躍出」し、それらを後世に伝えるにも「好個の資料」と絶賛する。その左頁には、「横浜掃部山に建設せし井伊直弼の銅像」と「相州久里浜海岸の伯理提督上陸記念碑」の写真が掲げられている。

先の両者の肖像から転じて、ここでは両者が顕彰されている画像の掲載となる。つまり井伊についてみれば、まさに「横浜全市民が歓欣慶祝」した様相の一端が表象されているといえる。

以下九丁では、横浜の建造物、神社仏閣、祝典参列各国艦艇の写真が展開し、そして二〇丁ばかりは、開港五十年祭のバレードなどの様相を伝える写真が続く。

こうしてようやく編者成田による「開港五十年記念帖 編纂の辞」にゆきつけば、ここでは、編纂の目的に「横浜港の沿革」を知悉させることがうたわれている。それは、「僅々五十年の短時日を以て頗る長足の進歩を遂げ」たというにつぎるが、それを知らない住民が少なからずいることを、成田は遺憾という。横浜に住むひとびとに知らすべきその土地の歴史とはすなわち、「既往五十年の昔時、寂寞荒涼の一寒漁村たりし横浜港が、東洋随一の貿易港として其名を世界に発揚するに至りし顛末」との、飛躍発展の歴史である。また『記念帖』の特色とされる百数葉の写真については、「本帖に幾多の光彩を添ふるもの」と、編者に確認されている。

『記念帖』は、第一編「横浜開港沿革誌」、第二編「神

社仏閣沿革誌」、第三編「五十年祭記念誌」、第四編「開港記念祭余録」、第五編「記念祭祝典余録」などよりなる。すでにみた三つの史誌は、いずれも開港五十年祭(七月一日)に間に合わすべく刊行されたため、開港五十年祭の祭典そのものは記すべくもなかった。それゆえに、『記念帖』がその第三編から第五編において全体の四割り近くの紙数を割いて開港五十年祭の設備、各団体・各町団体の祝祭と余興、その発端と経費までを記しているのは特筆すべきで、まさに「後世に至り之を参考と為すに足るものと認め」(堀谷)るに値する構成となっている。この『記念帖』の位相を二点にわたり述べよう。

第一は、『記念帖』が冒頭に掲げた明治天皇夫妻の肖像とかかわっている。第一編第一章「総説」の冒頭書き出し——「建、国、神、武、紀、元、二、千、五、百、六、十、九、年、輒、ち、明、治、四、十、二、年、七、月、一、日、は、実、に、我、が、横、浜、開、港、滿、五、十、年、の、嘉、辰、た、り、し、也」——が天皇夫妻の肖像に呼応している。つまり、横浜開港の歴史が神武紀元暦と重ね合わされ、しかもこのことは現在の横浜港が「帝都の閩門にして東洋貿易中樞の地歩を占め大廈高樓櫺比し、全世界を對手として通商交易の業に従事する会社諸商店等其数挙げて算ふべか

らず」というほどに遂げられた発展により確認されている。「日本帝国の国情」が「其旧習を持續することを許さざるの機運に際会」したのは、まさにペリー来航に始まる横浜の開港であり、こうして「開国の端を啓き今や世界有数の文明国」となり、かかる「帝国の声誉は陸々乎として地球の全面に輝き巨るに至」ったと称揚されるのである。すでに他誌に記述されていた二つの言説がここ『記念帖』に至れば、一つに明治天皇と神武紀元曆を登場させ、二つに横浜と帝国日本の発展の榮譽は「地球」規模にまで拡大され、最大級の賛辞がよせられているのである。

ところで蓋し奇異に感ずるのは、第二編である。開港五十年を記念するにあたり、なにゆえに「横浜全市内に散在する」(堀谷)「廿余の神社と六十余个寺院の縁起沿革」(成田)を記述しなければならなかったのか。各神社・各寺院の縁起沿革は、それぞれ二〇と六四の節に分かたれている。各節に先立ち編者の述べるところをみよう。「我が横浜は開港以来僅々五十年のみ」とは、このときの横浜開港史にいわば定式化された成句である。横浜の史誌編纂者のだれもが認識するかかる歴史のあたり

しはしたがって、横浜に暮らす「四十万の市住民は、其開港以前よりの住者もありと雖も概ね中年の移住者多数を占め、甚しきに至りては両三年来の移住者も亦た尠から」ざる様相を示している。よって、「市内に散在する八百万の神社は勿論、諸仏閣の所在及び縁起沿革等を知悉せざるもの復た多から」ざればこそ、この第二編が必要とされたのである。このとき二〇世紀初頭の横浜は、開港体験をめぐる世代交代と市域拡張や入寄留者増加の最中にあり、したがってかかるときに「一体化した市民」による開港五十年祭の挙行を可能とするためには、一つに「共通する歴史」が示されねばならなかった。その意味での「共通する歴史」がここ『記念帖』の叙述において、神社仏閣の所在と縁起沿革であり、しかもここには「抑も我が朝は、靱八百万の神等相寄り相議り給ひて国を建て給ひし」という編者の神国観が表明されていた。「五千余万の日本国民は、悉く日となく夜となく神冥の加護に浴し、其身の幸慶を保持しつゝある所以のものたるを認識す」との規制のうちに、当然のこと「横浜市民」もある。こうして、天皇の聖慮と国民の敬神の念とが普くゆきわたる神国日本の国民性に裏打ちされた

「横浜市民」であることは、市内すべての神社仏閣の縁起沿革の記述により支えられようとしているのであった。これが『記念帖』の第二の位相を示している。

既述のように開港五十年祭を機として「横浜市民」意識の醸成が目指されたとはいえず、市民意識などというものには日常性や継起性は希薄である。だからこそ一大イベントとしての開港五十年祭の開催が必要となり、ここにこそ「横浜市民」意識がいわば瞬発したのである。かかる祭典が市民意識醸成の集団性にかかわれば、祭典を収録した冊子は薄れゆく市民意識の個別化された反復の場となる。しかも、横浜史誌に不可欠の二つの言説が『図録』に記されてみれば、地球大にまで輝きわたる帝国の栄誉とそれを治める天皇とを登場させているのであった。

小括と展望

開港五十年を機に作成された四つの史誌の叙述には、それぞれの歴史意識をめぐる戦略が込められていた。史誌を律する文法との齟齬を含みながらも歴史叙述は展開し、そのうえですべてに共通していたのが、叙述におけ

る「横浜市民」の発現であった。それらを見たいま本稿を閉じるにあたって、歴史叙述と歴史意識について二つのことを考えてみよう。

一つは史誌としてつくられた歴史がもつ意味について。「歴史伝承は、それをつくり保持する人たちの、イデオロギーの表現としての意味をもっている」(川田順造)⁽⁸⁾。

とはいえ川田もいうように、「イデオロギー表現」と「真実」とを峻別すれば歴史の探求が終わるのではない。川田に導かれれば、だからこそ「既存の状況の反映ないし説明」であると同時に「既存の状況を逆に規制する力」として歴史叙述をとらえなくてはならない。本論で取りあげた史誌、そしてそこに収録されたひとびとの記憶のそのほとんどが横浜開港を寿ぐ開港五十年祭の祝典を、そして現在へと至る横浜の発展を正統化する言説であった。そこでは人ひとりひとりが「横浜市民」でありつつ、「日本」を構成する国民として回収されようとしていた。既存の状況を説明しつつそれを規制する力としての言説が、「横浜市民」の語句を介していくつもの史誌に記述されていた。歴史を切断するほどの飛躍を祝し、同時に横浜＝日本の発展を寿ぐ言説は、飛躍発展と国家

日本への連動とに裏打ちされた「横浜市民」であるとの意識として創出された歴史意識であった。⁽⁹⁾川田にならない「イデオロギー」の語をつかうなら、このように現在を説明し・正統化し、かつ読むものに「横浜市民」である、ことを意識化させる歴史意識を「横浜イデオロギー」と呼ぼう。

ならばすべてがかかる歴史意識の回路へとなだれ込んでしまうようにみえるものの、「生きたる歴史の蓄音機」により再生された「横浜の建設者」の記憶は、そのそれぞれの生にみあうだけの多様性をみせていた。〈横浜イデオロギー〉に回収されないもう一つの回路が、「生きたる歴史」Ⅱ〈生きたる歴史〉ともいいうるこうしたひとびとの記憶であった。しかしそれでも、開港五十年祭という横浜にとっての一大祭典の挙行は、そこで想起される過去Ⅱ記憶の語りに「横浜市民」であることをすべり込ませていた。

それでは歴史意識の多様さとはなにか、を二つめに考えてみよう。横浜にとって一九八九年は市政一〇〇周年・開港一三〇周年の年となり、それを記念して『図説横浜の歴史』（横浜市市民局市民情報室広報センター発

行）が公刊された。そこには「ふるさと横浜、今日を築いた、先人たちの歩み」（横浜市長細郷道一）が記され、その第一章「横浜の、ずっと大昔」は、「横浜の歴史を切り開いた人びと」（小宮恒雄執筆）の項に始まる。ここでは「横浜の地に遠い祖先のくらしが始まったのは、いつごろのことだったのだろうか」との問いに導かれて先土器時代にまで歴史が遡られ、「横浜の歴史を最初に切り開いたのは、この水河と火山活動の時代を生きた人びとである」と語られる。「今のところ市内で最も古い遺跡」は旭区矢指谷遺跡で、その存在により「横浜の歴史は二万二〇〇〇年をさらにさかのぼることが明らかになった」。そのうえでこの語りは「最近になって、横浜の背後に続く多摩丘陵の一角で、……約五万年前の中期旧石器時代の遺跡が発見された」ことを例示し、「今後市内でも彼ら（ネアンデルタール人）の足跡が確認されれば、横浜の歴史の始原は、いっきよに倍近くもさかのぼることになるであろう」と、読むものを「新発見であくらむロマン」（！）へといざなう。また横浜市役所の『市政概要』（一九九四年版）をみれば、その「横浜のあゆみ」には「文献でたどることのできる横浜の起源は、

11世紀までさかのぼることができ」と記されながらも、同じ頁にある「歴史年表」は一八五四年の「日米和親条約(神奈川条約)を締結する」に始まっている。「ロマン」をふくらませる遙かな横浜の歴史の始原、正確さや客観性に則らうとする文献学にもとづいた横浜の起源、そして国政上の条約締結が意味するところの横浜開港の契機——ここには少なくとも横浜の歴史のたどり方が三つあることが示されている。

「歴史」とは、本源的には、自己が生きていくうえで、どうしても必要とされるだけの拡がりや深さをもつ時間
 Ⅱ「過去」にかんする知識」である(小谷汪之)⁽¹⁰⁾ならば、五万年もの過去に遡りうる歴史を「横浜の」と語り始めることの必要性は那邊にあるのだろうか。考古学的知見により吉田勘兵衛翁の語りをさらに二五〇倍も遡る歴史を「横浜の」と始める語りはまさに、小谷のいう「歴史学の自己疎外」である。科学性や客観性をもったと主張する歴史は、「イデオロギー」とは無縁のようにみえる。しかし、それを「横浜の」と語り出すとき、それは「イデオロギー」からの脱却ではなく、〈現在性〉に規定された過去の解釈Ⅱ再構成である歴史叙述というもののへの

無自覚さを露呈させている。

記された歴史とは、解釈された過去の再構成といいうる。ならばその「過去」を意味づけるということは、まさに、自分自身の存在を意味づけることにほかならない(小谷)。歴史に向きあうこうした意味での〈主体性〉のクリティックがもとめられているのであり、かかる〈主体性〉を考え抜くことが、「横浜市民」という実定性をも揺るがしてゆくだろう。⁽¹¹⁾

(1) 歴史意識の問題化については羽賀祥二の『明治維新と宗教』(筑摩書房、一九九四年)や「風土記」「図絵」の編纂と地域社会」(『関東近世史研究』一九九四年五月)など一連の研究を、歴史叙述と歴史意識・記憶の問題化については安保則夫「都市近代化と社会的差別の形成」(ルイ・シュヴァリエ『労働階級と危険な階級』付録、みすず書房、一九九三年)、成田龍一の「方法としての「記憶」」『文学』一九九五年春)・「関東大震災のメタヒストリーのために」(『思想』一九九六年八月)を参照した。また別稿「横浜開港五十年祭の政治文化」(未発表)では①祭典をめぐる言説と象徴、②祭典が惹起した葛藤や齟齬をおして、歴史意識と「横浜市民」であること(Ⅱアイデンティティ)との関連を問題化した。本稿は別稿と合わせて一つの作品となるためそれを参照すべき箇所は多いが、その

注記は省略した。

(2) 明治文化研究会編『明治文化全集』第八巻風俗篇、日本評論社、一九二八年、所収。

(3) たとえば「南京町は……一種の特色を放ちつつあり……不潔は彼等の特性にして、富者も此特性を改善する能はざるが如し」、「三吉町は最下層人物の巢窟なり」「庚耕地は俗に乞食谷戸と呼ぶ、南太田の一遇にあり」と同時に「清国人……は概して精励にして忍耐あり」、「南太田の……貧民等は……能く働けり、……比較的分限者ある」ともいう。こうした他誌にない「南京町」「貧民」への視線も『五十年史』にはある。ここで横浜開港資料館編『横浜もののはじめ考』(一九八八年)をみよう。該書は「文明開化のふるさと」といった「一面的な」横浜像にかわる「さまざまな民族が固有の文化を失うことなく、共存していた」「国際色豊かな都市」としてのイメージを造出する(一八頁)。ここでは「民族」の「固有の文化」なるもの、「彼等の特性」が「不潔」に固定されていることが無視され、対等にして平等な文化が存在していたかのような歴史像が掲げられている。

(4) 戦争・軍事の記憶と国民意識との関係を論じたタカシ・フジタニ『天皇のページェント』日本放送出版協会、一九九四年、を参照せよ。また幕末の大火についてもすでに「横浜市の大半を焼き尽したり」と記述されている。

(5) 『横浜商工会議所百年史』一九八一年、四二—四一四頁。

(6) 横貫紙上「開港側面史」の連載は『側面史』刊行後も一九〇九年一月七日まで続いた。『側面史』未収録分をもふくめた「開港側面史」は石井光太郎他編『横浜どんたく』上下、有隣堂、一九七三年、に「復刻、校訂」(凡例)されているが、その巻末にある索引(横貫掲載順)をみればわかるように編集にあたり掲載順序は崩され、かつ横貫紙上「開港側面史」と『側面史』との異同(後述)が記されていないといった不備がある。

(7) 前出『横浜もののはじめ考』は「公文書」に比べ「古老の回顧談」は「史実性に問題」があるという(一八頁)。客観性をもった史実という基準を設定し「古老の回顧談」を裁断する立場をわたしはとらない。

(8) 川田順造『無文字社会の歴史』岩波書店、一九七六年、参照。

(9) いまでも横浜市は「日本を代表する国際貿易港」「わが国最大の国際港湾である横浜港」を誇り、「開港以来一三五年、貿易立国日本の物流及び生産の拠点として、我が国経済の発展を支え」てきたと歴史を記す(横浜市「市政概要」一九九四年版)。

(10) 小谷汪之「歴史学の自己疎外」西川正雄他編『現代歴史学入門』東京大学出版会、一九八七年、参照。

(11) 伊豫谷登士翁他編『ナシヨナリティの脱構築』柏書房、一九九六年、の議論を念頭におき、「ナシヨナリティの脱構築」に連動する「地域性の脱構築」を、わたしは展望している。(一橋大学助手)